

葬式中の帰宅のこと海軍の電波探知機

舟越辰緒（当時丹後半島に疎開中、9歳時の話）

昭和20年夏、私は小学校3年生の子どもだった。当時住んでいた京都市内から丹後半島の経ヶ岬に近い半農半漁の村に学童疎開していた。米軍機による全国への爆撃は苛烈をきわめ、狙われやすい都市部から親戚縁者をたよって田舎の方へ「疎開」する家族が増えてきていた。そういう縁者のない家族もあり、せめて子どもだけでも守ろうと学校単位で「学童疎開」をさせようとする方針が決まり、私の親がそれに応じたのだった。私は小学3年生、9歳だった。

そこへ8月の終戦勅語。といつても戦後の混乱の最中。疎開先から急に自宅へ帰されるわけもなく、しばらくは疎開先にとどまっていたのだ。

ある日、こどもたちの面倒を見てくれていた先生に連れられて数キロ離れた経ヶ岬に遠足した。ここは若狭湾、海軍の舞鶴鎮守府の入口に面した防衛拠点。一等灯台がある。

行ってみると電波探知機があった。いわゆるレーダーである。日本海を見下ろす小さな丘にそれはあった。今でいう海上輸送用のコンテナふうの箱からネット上に金網が屏風のようにのっていて、これが探知機のアンテナだろうと子どもにも想像できた。コンテナとネットは円形状の軌道上にあって360度どこでも向くようにしてあった。

コンテナとネットは全部暗緑色の塗装だった。若い係の人にコンテナに入らせてもらうとその室内はびっしりと無線機器のようなのが並んでいた。小さなブラウン管があって緑色のサインカーブ線がちらちらと運動していた。「これで海のうんと遠くまで敵のありかが分かるのだ」と説明があった。

これが当時の日本国少年が見た最新兵器だった。海軍がこれらを宝物のように極秘にしていたのだろう。あの説明者はどう思って子どもたちに説明してくれたのだろうか。海軍士官か下士官のひとりであったと私はいまでも信じている。